千葉県こども病院広報　CHIBA CHILDREN'S HOSPITAL

かるがも

第57号

https://www.pref.chiba.lg.jp/kodomo

2023年〈令和5年〉3月

病院長あいさつ

病院長　中島　弘道

新しい年を迎えましたが、皆様いかがお過ごしでしょうか。
2022年は新型コロナ流行の継続をはじめ、変わらず困難の多い年でした。そうした中、11月に開催されたサッカーワールドカップでは、日本代表の活躍に興奮し大いに励まされた方も多かったのではないでしょうか。最後まであきらめることなく戦い抜く姿に感銘いたしました。よりよい医療を提供し続けるために私たちも粘り強く進んでいかねばと気持ちを新たにしております。

新年を迎え、テレビでは初詣でにぎわう神社や箱根駅伝の応援の人々の姿が報道され、社会活動が少しずつ活性化していく流れを感じます。子どもたちにとっても学校生活等が元に戻ってくることはとても大切なことです。しかしコロナ流行はまだまだ全く予断は許さず、当院でも第8波流行への対応に力を尽くしているところです。それでも4年目を迎える今年こそはコロナに打ち勝ち進んでいけることを願ってやみません。

さてマイナンバーカードの保険証利用が開始されましたが、当院でも本年導入を予定しております。小児では公費負担の制度と管轄が多岐にわたり、すべてに対応できるシステム構築に多少時間を要しておりますが、きちんと対応してまいります。

本年4月にはいよいよ「こども家庭庁」がスタートします。省庁の垣根を超え、子どもを中心にした政策の作成と支援を進めることを目的とし、「企画立案・総合調整部門」「成育部門」「支援部門」の3部門から成り立ちます。そのうちの「成育部門」の母子保健、「支援部門」の虐待対策や障害児支援などは、私たちが継続してかわってきた分野です。こども家庭庁のリーダーシップに大いに期待したいと思いますが、私たちこども病院もその政策の実現にむけて今後も自治体、教育、福祉と協力していきたいと考えております。

うさぎ年を迎えて想うこと

看護局長　神明　直美

2023年を迎えました。今年はうさぎ年です。うさぎはピョンピョンと軽やかに跳ね上がることから、成長が期待される年のようです。うさぎはとても愛らしいですが、私が子どもの頃に飼っていたうさぎは、たくましく、囲いを作って草むらで遊ばせておくと、よく地面に穴を掘って脱走してしまい、捕まえるのが大変だった記憶があります。今年は壁にぶち当たったとき（もちろん壁に遭遇しないことを願いますが）には、たくましく乗り越えられるようになりたいです。

さて、私は昨年4月にこども病院に異動してきましたが、この9カ月間のことを振り返ってみたいと思います。

《看護局が頑張ったこと》

看護局が頑張ってきたことは、新型コロナウイルス感染症のため、多くの職場離脱者がいましたが、部署の職員の協力と他の部署からの応援体制で乗り切ったことです。

7月から8月にかけての第7波では、新型コロナウイルスにかかる子どもの患者さんが急増し、受け入れきれなくなるかも知れない危機感がありました。県内には重症の子どもの患者さんを、例えばECMOで治療できる病院が数えるほどしかありません。新型コロナウイルス感染症の受け入れ病床数を増やして対応しました。どこの職場でもあることですが、こども病院では小さい子どもを育てている職員が多く、家庭内での感染や濃厚接触者となり、勤務をすることができない看護師、看護補助者、保育士が1日に20人から30人になることがしばらく続きました。12月から1月にかけての第8波でも同様の状況となり応援体制で乗り切っています。看護師などは1か月単位で勤務の予定を立てていますが、予定の変更に協力をして対応してくれた看護局の職員に感謝しています。

その他に6月の病院機能評価受審と臨時医療施設への派遣があります。
6月に病院機能評価を受審し、5回目の認定を受けることができました。副看護局長、看護師長が各部署のスタッフとともに時間をかけて準備をしました。認定を受けたからにはこの状況を維持、向上できるようにしていくことが課題だと思います。

臨時医療施設への派遣は、前年度より派遣されていた看護師9名は4月初旬に戻ってきて、しばらく臨時医療施設での受け入れは休止していました。第8波でフェーズがレベル3になり、12月19日より再び5名を派遣し、多くの病院が休診となる年末年始に平日同様に患者を受け入れ、現在も頑張って勤務しています。

最後に、新型コロナウイルス感染症が発覚して丸3年が過ぎました。今年こそ感染症が落ち着き、年末には穏やかな1年だったと振り返ることができることを祈ります。

脳神経外科

脳神経外科では主に二分脊椎や頭蓋骨早期癒合症などの先天性疾患や水頭症、脳腫瘍などの病気を対象に常勤医2名による専門的な診療を行っています。

小児の脳神経外科疾患は成人における疾患とは異なり、その診療面でも多くの点で特殊であることから対応できる病院は少なく限られています。このため当科には毎年県内の多くの施設から様々な症例が紹介されてきます。特に小児の脳は初期治療時にまだ成長過程にあることが多いため、疾患によっては一旦治療が終了した後でも長期にわたりその後の成長過程を見守っていく必要があります。当科では基本的にお子さんが成人期に達するまでフォローアップを継続しています。

代表的な疾患としては二分脊椎が挙げられますが、この疾患では膀胱直腸機能や下肢機能などに関わる合併症が多くみられることから泌尿器科、小児外科、整形外科、リハビリテーション科などの他科と密に連携しながら患者さんの成長に合わせた診療を行っています。また、就学時など成長過程の節目には、患者さん本人、家族と各科、外来看護師らが一堂に会して情報を共有しながらその時点における問題点について検討、さらには患者さん自身の病識を高めて自立を促すことを目的とした二分脊椎外来も行っています。

また治療経過中の患者さん本人や家族の心のケアサポートについてもこども・家族支援センター内の地域連携看護師、チャイルドライフスペシャリストやソーシャルワーカーら多職種と連携しながら関われるようにしています。今後も高度かつ安全な治療を患者さん本人、家族が十分納得して受けていただけるよう努めて参りますのでよろしくお願いします。

1 氏名　2 出身地　3 こども病院の好きなところ
4 医者になってなかったら？　5 ストレス解消法
6 休日の過ごし方

1 **沼田　理**(ぬまた　おさむ)
2 岩手県盛岡市
3 こども病院の好きなところ
こども達の成長に関われること
4 パン屋さん
5 寝ること
6 家でゴロゴロ

1 **安藤　亮**(あんどう　りょう)
2 千葉市
3 まとまりやすい距離感
4 宇宙飛行士
5 読書（司馬遼太郎　塩野七生
コナンドイル　他、新書）
6 トレイルランニング　スカイランニング
マラソン　ウルトラマラソン

救急総合診療科

救急総合診療科は、昨年からスタッフが2人から5人に増えました。

それに伴い、今までは主に急性期のcommon diseaseに対応していましたが、今後はお子さんたちが社会的な問題も含めて、安心して生活を送れるよう、総合的に対応していきます。

今まで通り、急な発熱・嘔吐、肺炎や胃腸炎、救急車対応など、急性期の疾患を外来から入院管理、退院後のフォローまで行います。また、開業医の先生方からの紹介を各科に振り分けたり、診断のつかないお子さんの診断・治療を行ったりもします。

そのほか、臓器別個々の疾患については各専門家が対応しますが、各科と連携し、基礎疾患のあるお子さんの入院中の全身管理などを行います。

慢性期では、お子さんの疾患だけでなく、栄養面や成長・発達・発育、心理面・社会的背景なども総合的にマネージメントしていきます。また、身体的虐待だけでなく性的虐待も対応していきます。

小児外科とチームを組んで、消化管内視鏡を用いて、新生児から学童まで様々な年齢でみられる消化器疾患に対応します。

消化管内視鏡は診療に際して強力な武器となりますが、成人に比し検査の手間と時間がかかりハードルは高くなります。当科では、消化管内視鏡検査を迅速に行える体制を整えています。上部消化管内視鏡（胃カメラ）や下部消化管内視鏡（大腸カメラ）に加え、カプセル内視鏡で小腸を検索することができます。（ただし、カプセル内視鏡は、新生児や乳児は対象外となり、幼児でも体格によってはできないことがあります。）

成人では内視鏡検査を外来で行いますが、当院では入院していただき、麻酔科の協力のもと、静脈麻酔もしくは全身麻酔下に行い、苦痛を感じることなく安全に内視鏡を施行しています。

1 氏名　2 出身地　3 こども病院の好きなところ
4 医者になってなかったら？　5 ストレス解消法
6 休日の過ごし方

1 **夏井　款子**（なつい　よしこ）
2 高知県
3 みなさんやさしい
4 OL
5 お風呂にゆっくり浸かる
6 決まっていない

1 **小川　優一**（おがわ　ゆういち）
2 千葉県君津市
3 時間がゆったり流れているところ
4 教師
5 ひとりカラオケ
6 家族と一緒にいろいろする

1 **伊藤　貴伸**（いとう　よしのぶ）
2 北海道
3 高層階の西の窓からすごくきれいに富士山がみえること
4 漁師、今は農家がいい
5 寝ること
6 料理、果樹・観葉植物いじり

1 **酒井　敦**（さかい　あつし）
2 千葉市
3 専門家がそろっているところ
4 動物園の飼育員
5 おいしいものを食べる
6 娘と遊ぶ

1 **朽方　豊夢**（くちかた　とむ）
2 関東地方
3 自分達の足りていないところに常に向き合いながら、遅々としているかもしれませんが、常に発展を目指しているところ
4 また小児科医になりたいです
5 現場での悩みの解決糸口を見つけられると、少しほっとします
6 仕事と子どもたちのことをもっと忘れられるといいのですが

口唇口蓋裂診療チームの紹介❶

当院では、形成外科、耳鼻咽喉科、歯科、新生児科、遺伝科など複数の診療科や、医師、看護師、摂食・嚥下障害看護認定看護師、小児看護専門看護師、助産師、言語聴覚士、管理栄養士、チャイルド・ライフ・スペシャリスト、メディカルソーシャルワーカーなど多職種で連携して、お子さんの成長にあわせて必要な治療・ケアを段階的、継続的に行っています。

ご家族は、口唇口蓋裂の赤ちゃんをみて色々な心配があると思います。新生児期には、「唇の割れは直るのかしら」「おっぱいに時間がかかるし飲むのが下手みたいだけど成長はどうかしら」。1～2歳になると、「言葉が上手く話せるかしら」「歯ぐきが割れているけど歯がちゃんと生えるのかしら」と思われるかもしれません。また、お子さんの成長過程において、ご家族はもちろん、お子さん自身も他にも色々な不安や疑問が出てくるかもしれません。大人になるまで段階的に治療を受けていく必要がありますので、お子さんが治療に主体的に取り組むことができるようサポートしていきたいと思っています。

診療チーム一同、ご家族とともに、お子さんが健やかに成長していけるよう取り組んでいきます。

言語聴覚士の関わり

当院には国家資格をもった言語聴覚士が常勤3名、非常勤2名働いています。口唇口蓋裂のお子さんに対しては、形成外科初診時から主に哺乳に関して助産師や栄養士とともに診ています。また全体的発達・言語発達の評価、鼻咽腔閉鎖機能（話すときや食事のとき、軟口蓋が挙上し口腔と鼻腔を隔てて呼気や食べ物が鼻に漏れないようにする機能）の評価、構音の評価を年齢に合わせて行います。就学前後になり構音障害が残っていて訓練が必要なときは、当院で訓練を行う場合と、居住地近くの訓練施設と協力して進める場合があります。お子さんの成長を見守りながら、必要な時期に必要な治療・支援ができるよう、乳幼児期から継続して関わっています。

ホームページ紹介

千葉県こども病院では、ホームページで口唇口蓋裂診療チームのご案内をしています。診療内容や治療の流れ、支援内容を紹介していますので、ぜひご覧いただき、ご家族にもご紹介ください。

堂前　有香

\こんにちは！/
小児看護専門看護師の堂前です。

小児看護専門看護師は、公益社団法人日本看護協会に認定された看護資格で院内に3名おります。病棟やこども・家族支援センターに所属し、お子さん・ご家族への直接的な看護実践を行っています。そして、疾患や障がいをもちながらお子さんが成長発達し、その子らしく療養生活を送り大人になっていくことをご家族と共に支える支援に関しても相談を受け、解決の糸口を見出せるように働きかけています。

当院は専門性が高く高度な医療を必要とするお子さんが入院しているため、看護師は専門性の高い医療の知識だけでなく、成長発達、小児における倫理、家族看護など多角的に子どもやご家族をアセスメントし、多職種から成るチームで看護を提供する力が求められます。その力を段階的に育めるように継続教育の検討、院内研修の開催、看護研究の推進に携わっています。また、看護師や医師、コメディカルスタッフからの相談に対応し、より良い看護や医療を提供するために調整を図っています。

私は、2019年よりこども・家族支援センターの成人移行支援室に所属し、お子さんの自立（自律）支援や、成人医療施設への移行支援を行っています。小児期発症の慢性疾患をもつお子さんも成長して成人期を迎えます。その方それぞれが、自分の身体や治療について理解をされ、大人になってからも自分で考えて主体的に体調管理ができることを大切に考えて活動をしています。成人移行支援運営委員会に所属し、トランジション（成人移行支援）外来を担当したり、糖尿病支援チーム、小児消化器疾患チーム、二分脊椎外来チームなどの患者支援チームの活動に参加して、自立支援を行っています。

▶トランジション（成人移行支援）外来

多臓器にわたる疾患のため複数の診療科を受診していたり、社会生活に影響がある体調管理の継続が必要な患者さんなどには、トランジション外来で看護面談を行い支援をしています。自記式サマリー「マイ・パスポート」の記載を支援しながら病気や治療の理解の確認や、学校や職場での病気や体調の伝え方、成人期の医療機関の選択などについてサポートをしています。また、助産師と協働して、慢性疾患や治療を考慮しながら性教育も行っています。当院のホームページでも成人移行支援について紹介していますので是非ご覧ください。

▶自記式サマリー「マイ・パスポート」の活用

今までの治療歴や生活上の注意点などについて自分で記載をする冊子を作成しました。希望者に配布しています。病名・内服薬・受診医療機関・受診したほうが良い症状とその時の対応、これからのライフイベントで気を付けたいこと等の項目があります。主治医や薬剤師、看護師などから説明を聞いた後に自分の覚え書きとして記載してもらったり、大人になってから見返して経過を振り返ることにも活用できます。

「ハラの輪」プロジェクト

プロバスケットボールチーム千葉ジェッツふなばしに所属する原修太選手は、2020年に自身の潰瘍性大腸炎の罹患を公表されてから「ハラの輪」として自身で社会貢献活動に取り組まれています。

「コロナ禍での入院生活で、長い間家族との面会も制限があったこども達へ、少しでも夢や希望を与え、明るい気持ちになってもらいたい」原選手の想いとこども病院の想いが一致し、感染対策に留意し、交流がスタートしました。

11月 原選手がこども病院を訪問してくださいました

病棟とリハビリ室でこども達と交流しました。

12月 原選手からクリスマスプレゼントが届きました

2月 ポータブルハイタッチを行いました

原選手をはじめとする千葉ジェッツの選手がいる船橋アリーナをインターネットで繋ぐ「ポータブルハイタッチ」(離れていても触れ合う感覚を伝えられる体験)を行いました。

試合前の原選手のハイタッチやドリブルの振動を感じたり、直接お話をすることができました。

原選手だけでなく、たくさんの選手やジャンボくん、マスク・ド・オッチーさんも駆けつけてくれました!

約2時間の試合をみんな大興奮で応援しました。

この取組には、千葉ジェッツ様、NTT様、NTT東日本様にご協力いただきました。素敵な時間をありがとうございました。
感染対策をおこなったうえで、今後も交流等の取り組みを実施してまいります。

CHIBA CHILDREN'S HOSPITAL 千葉県こども病院

〒266-0007 千葉県千葉市緑区辺田町 579-1　TEL.043-292-2111　FAX.043-292-3815